

天井画に描かれたサクラソウ

— 武蔵野・三富新田に伝えられる木ノ宮地藏堂の天井画 —



◀ 木ノ宮地藏堂（三富）天井に描かれたサクラソウ

木ノ宮地藏堂 ▼



雑木林の新緑が眩しい4月24日は三富新田に鎮座する木ノ宮地藏の縁日である。木ノ宮地藏堂は、武蔵野台地の開拓で知られる三富新田の開拓(元禄7年～9年・1694～96)の際に開拓農民の菩提寺として建立された多福寺の境内に広がる雑木林の一画にある。ふだんは堂宇は閉じられ参詣に来る人もまだらだが、この日は堂宇も開かれ、近郷近在から参詣者が集まり大変な賑いをみせる。縁日の日に、木ノ宮地藏堂の内陣を覗くと、天井に描かれた植物画を垣間見ることが

できる。そのうちの一枚にサクラソウが描かれている。

サクラソウは西側から2列目の本尊側から3段目の格子天井に描かれている。サクラソウは僅か60センチ角の格子天井の中に3株が描かれている。それぞれの株には1本ずつの花茎が伸びる。中央の前面に描かれた株には花房が6房ありすべて咲き開いている。中央奥の花房には5房咲く、左奥に描かれたものはまだ蕾のままである。3株のいずれもの花は、いずれも淡い桃色に描かれているが、中央奥のサクラソウの花房の

うちの3房には花卉の何枚かは赤色が濃く描かれた花弁にしぼりになっているようにも見える。これは高い天井画であるため十分な観察をしきれていないが、淡い桃色を出すために混ぜた塗彩顔料が、分離して生じたものと判断するのがよさそうである。

地藏堂内陣の107枚の格子天井にはそれぞれ1種類ずつ植物が描かれている。107枚の植物画は、ダイコン・ナス・ソバ・ペニバナなどの農作物やボタン・ハゲイトウ・キク・テッセン・サギソウなど鑑賞栽培されていたと思われる植物、コブシ・エノコログサ・ツユクサ・スミレなどの雑木林の樹木や野草の類までさまざまである。

この植物画の作者は、タンポポの絵の隅にある落款から鈴木本英という人物であることがわかる。この人物については、この地藏堂に奉納された「鯉の滝登り」

(文化6年・1809)と隣町の大井町神明神社の「三神図」(寛政11年・1799)の絵馬の作者であることと、地元上富の出身という伝承があるに過ぎないが、天井画が描かれたのは地藏堂の建築された安永6年(1777)とすれば、鈴木本英の若いころの作品と判断される。

鈴木本英の描いた107枚の植物画は「武蔵野の植物の集成か」「身近な本草(薬草)か」など様々な解釈があるが、確かな答はない。鈴木本英の作画した時代は化政文化の時代に当たる。化政文化は江戸の成熟文化の時代と共に、探険・紀行や博物学の隆盛したこともよく知られる。鈴木本英の描いた107枚の植物画の意味は判然とはしないが、博物学的な考えの影響の下に描かれたものであることは間違いない。

三芳町教育委員会生涯学習課 松本富雄

浮間の桜草を訪ねて

浮間ヶ原の桜草圃場は、荒川の沿岸、田島ヶ原より下流域、東京都北区浮間の都立浮間公園内にあり、JR埼京線浮間舟渡駅のすぐそばにあります。毎年春には多くの人々が訪れ賑います。この圃場ができるにあたっては地元の方々のなみなみならない努力によるものなのです。昨年四月浮間さくらそう祭のとき、埼玉さくらそう会の吉岡義雄氏と一緒に浮間ヶ原桜草保存会会長の黒田信男氏のご案内により圃場を見学させていただきました。この日もこの圃場には多くの人々が訪れ、桜草は見事に咲き誇っております。

黒田氏からお聞きしたお話、頂いた資料によれば、ここ浮間ヶ原は田島ヶ原と同様、荒川沿岸に多くあった桜草の自生地の一つで、江戸時代の始めのころより知られる所となり、桜草の園芸栽培が盛んになった江戸時代の文化・天保期には桜の名所飛鳥山とならんで、桜草の名所として多くの花見客で賑ったと言われております。この自生地も昭和になり荒川の改修、築堤工事、関東大震災復興時の荒木田土の乱掘等により桜草ははだいに減少してゆき、昭和22年の戸田のオートレース場の建設のための残土埋め立てにより自生の桜草はなくなってしまいました。しかし昭和30年に入って、地元の人々の桜草復活の努力が始まります。昭和36年には北区が地元の人々の熱意を受けて桜草の保存事業を開始。37年には「浮間桜草保存会」が結成され、39年には圃場の一般公開が始まり、その翌年にはさくらそう祭

りが開催されることとなります。その後NHKテレビでの紹介等もあり浮間の桜草圃場は有名になってゆきます。そして平成元年には現在の圃場が完成します。

このようにして浮間ヶ原の桜草は復活しました。自生地と圃場、現在の土地の性格は異なりますが、田島ヶ原と浮間ヶ原は兄弟どうしと言うべき場所です。黒田会長さんのお話になるかつての浮間ヶ原も田島ヶ原と良く似た土地であったことがうかがわれました。

この春もまた、保存会の方々の心を込めた栽培作業によりこの浮間の地にはみことな桜草が咲くことでしょう。

浦和市教育委員会文化財保護課 高山清司



浮間公園の桜草圃場

サクラソウ関係図書紹介 (3)

那須の植物誌

生物学御研究所編

保育社 昭和47年 B5版 395ページ B5版 上製本

昭和天皇は、毎年夏を栃木県的那須御用邸で過ごされていたが、その期間に那須地方の植物の調査が続けられ、その成果として昭和37年に「那須の植物」が刊行された。調査は、その後も続けられ、その範囲も広げられたが、そうした成果を踏まえて本書が刊行された。巻頭に美しい原色写真184葉が収められており、その中に那須町小深堀のサクラソウが掲載されている。本文では、サクラソウ科11種(うち変種1)が掲げられており、サクラソウ属では、サクラソウ (*Primula japonica*)、ユキワリソウ (*P. modesta*)、サクラソウ (*P. sieboldii*) の3種がみられる。サクラソウは、産地として、桜沢、小深堀、長南寺、北条、茶臼(黒田原付近)の地名をあげている。小深堀のサクラソウについて、「花冠裂片の狭いものから広いものまであって、変異に富んでいる。」と説明されている。

皇居の植物

生物学御研究所編

保育社 平成元年 B5版 652ページ B5版 上製本

昭和7年から平成元年までの間に、皇居、北の丸公園、皇居前広場で記録したシダ植物、種子植物で、野生種他に栽培植物・帰化植物までが記録されている。巻頭の写真は232葉あり、その一つにサクラソウ (*Primula sieboldii*) がある。本文では、サクラソウ科2属7種が掲載されている。サクラソウ (*P. sieboldii*) は、吹上御苑(滝見の池畔)を産地とし、栽植品で群落になっているとしている。やや長い解説があり、田島ヶ原を含め、江戸近在のサクラソウのことについても説明されている。

一戸町のサクラソウ

岩手県二戸郡一戸町の馬淵川(まべちがわ)では、現在、国の農業水利事業として大志田ダムの建設計画が進行中です。このダム建設にはその上流地区に広い範囲の水没が伴います。そこで平成6年度と7年度に、水没予定地区の国有林野森林施策影響調査(環境アセスメント調査)が実施されました。調査を委託された一戸町文化財調査専門委員の小守一男氏は、その調査の際に、馬淵川上流の平糠川とその支流の宇別川の岸边に約1200株のサクラソウが自生していることを確認しました。これを受けて、町と地元自然保護グループ、そして水没予定地の地権者の皆さんが取った行動は、サクラソウの移植でした。移植先として町が用意した土地は、水没予定地

のさらに上流の沢沿いにあり、面積は約400㎡あります。そこではサクラソウの育成に妨げとなるクマガザサを刈り、水路や見学者用の歩道を整備するなど、周回の準備がされました。そして平成9年7月17・18日の両日、小守氏を中心とした地元の有志により、事業初年度分の数百株が無事移植されました。

その一戸町から、今後のサクラソウ保護、自生地管理を進めていく上での事例調査として、平成9年11月21日に小守氏を含めて3名の方が、田島ヶ原サクラソウ自生地の視察のために浦和市を訪れました。その際の印象が小守氏から寄せられましたので、以下で紹介します。

(紙面の都合により一部抜粋してあります)

＊ 希望と夢のサクラソウ ＊

前略

この度は、浦和市を訪れ、磯田洋二氏や市教委の方にお会いしサクラソウ (*Primula sieboldii* E. Morren) という植物を通じ共通の話題として学ばせていただくことをこの上ない幸せに思います。

ご指導いただく前に手前のことを簡単に紹介して

おきますと、実は一戸町のサクラソウの場合は、馬淵川(まべちがわ)沿岸農業水利事業に伴い湛水する地域の植物調査によって、点々と1200株ほどのサクラソウが自生していることが確認されたものです。絶滅に瀕しているサクラソウを是非次世代へ残しておきたいという願いから、東北農政局当局と一

戸町と町民が一体となって保護に乗り出し、サクラソウの移植事業として取り掛かったもので、今年は今春の初年度にあたります。

暗中模索のなか、昨年の予備試験的な移植結果を基に、今年にはほぼ全株の本試験移植を実施して来春の結果を待っている段階です。途中経過の観察では95パーセントの新芽を確認できたものの、最終的にはどの程度活着するのか確固たる自信もなく不安がつきまとっているのが実状です。

浦和市の皆様に一戸町のサクラソウの写真をお見せしたら「可愛い」という感想を頂戴しました。川縁に群状ないしは斑状に生育し開花はせいぜい20%程度のもので、厳しい生育環境のほんのりとしたピンク色は余計に可愛い感じを与えるようです。

田島ヶ原のサクラソウについては、文献・図書等で観念的ではありましたが、多少は理解しておりました。どうしても膚で感じ取りたいという思いに駆られ、サクラソウの姿が見られないこの時期に戸感いながらも、耳に入り心に著く、こんな心境で伺った次第です。

磯田氏も市教委の方も、田島ヶ原のサクラソウ保護について歴史的背景や生育状態・管理について、心のこもった口調で話してくださいました。

まず、植生管理については、生態系を維持することを基底に据え、ノウルシやオギとの共存を保ちながら、サクラソウの衰退を防ぐために侵入してくる植物の抜き取りや枯れたオギを除去するために野焼きをして生育環境を整えるなど、物理的に最小限度の手を加えるという方法で保護してられるということでした。

また、サクラソウの結実にかかわる送粉者（ポリネーター）の問題解決には、科学的な調査・観察を実施したり、増殖には人工的な試験管栽培を試み完成させるなど、極めて解決策が研究的なことに驚かされました。

なによりなことは、「浦和市天然記念物調査会」を組織してサクラソウの生育状況や自生地の生態調査など総合的な調査を実施していただけることです。このような施策を講じてまで市の財産を守るということでしょうか、サクラソウを貴重な文化遺産として子供たちの学習の場に提供していることでもうなすけませんが、サクラソウづくりは人づくりという理念をかいま見たような気がしています。



一戸町の自生種

サクラソウの開花期には、市民一般の方々への見学案内をしてサクラソウの理解と保護思想普及に力を注いでられる。それでいて観光という言葉は一度も使わずに説明なさったことがとても印象的でした。

サクラソウ自生地でも、なかなか話題は尽きず気が付いたときはすでに夕暮れ時でした。オギに包まれた「国指定特別天然記念物一田島ヶ原サクラソウ自生地」と刻まれた標柱に向かい、来春の田島ヶ原がみことなサクラソウで彩られる光景を想像しながら、心の中で密かに来春を約束しよならをしました。

1997. 12. 27

一戸町文化財調査専門委員
小守 一男



◀平成9年春の田島ヶ原

さくらそう通信

平成10年3月31日

編集・発行 浦和市教育委員会

浦和市常盤6-4-4

☎048-829-1796

印刷 関東図書株式会社



題字 教育長 浅見 匡